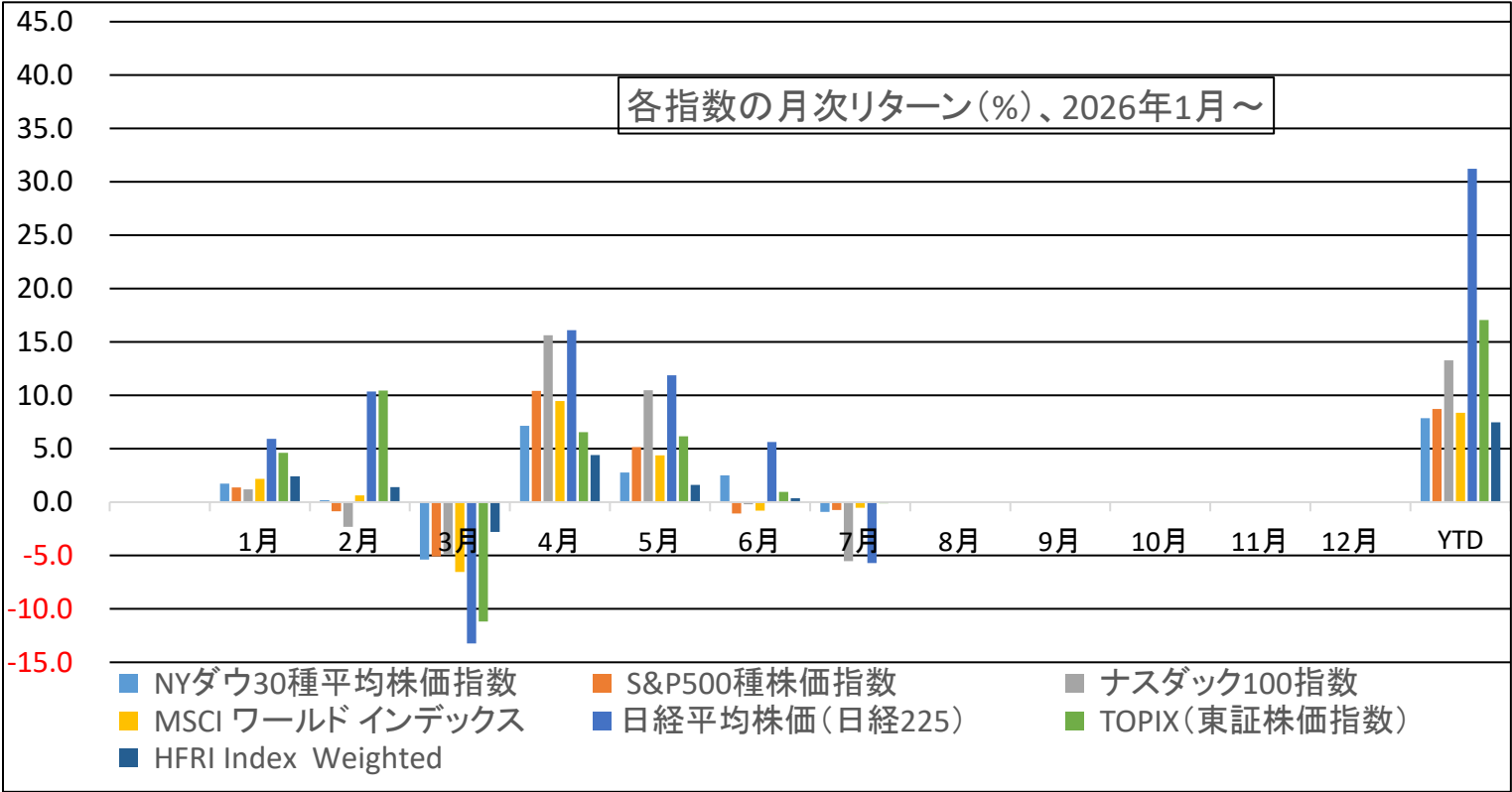


この月報は 2026 年 6 月のものですが、以下の表とグラフ及び総論は、この原稿執筆時の 2026 年 7 月 24 日時点でのものになります。

	2026	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	YTD
NYダウ30種平均株価指数		1.7	0.2	-5.4	7.1	2.8	2.5	-0.9						7.9
S&P500種株価指数		1.4	-0.9	-5.1	10.4	5.1	-1.1	-0.7						8.7
ナスダック100指数		1.2	-2.3	-4.9	15.6	10.5	-0.2	-5.5						13.3
MSCI ワールド インデックス		2.2	0.6	-6.6	9.5	4.4	-0.8	-0.5						8.4
日経平均株価(日経225)		5.9	10.4	-13.2	16.1	11.9	5.6	-5.7						31.2
TOPIX(東証株価指数)		4.6	10.4	-11.2	6.6	6.2	1.0	-0.1						17.1
HFRI Fund of Funds Composite Index		1.69	1.13	-2.09	4.25	2.05	1.13							8.32
HFRI Fund Weighted Composite Index		2.41	1.41	-2.78	4.40	1.61	0.37							7.49



注： 以下のコメントは、運用会社アンタークティカ社より共有されたレポートを基に、エアーズシー証券が 作成したものです。信頼できる情報に基づき作成をしておりますが、含まれる情報の正確性や完全性、 また使用された市場情報源の正確性や信頼性を保証するものではありませんし、将来の実績を保証また は示唆するものでもありません。エアーズシー証券は、当資料の分析、又はこれに関連した分析の使用 により生じた如何なる損失にも責任を負いません。エアーズシー証券の許諾なしに、当資料の一部又は 全部を引用または複製することを禁じます。

市場コメント（2026 年 6 月）

6 月は、3 月下旬の安値から企業業績を背景に大きく反発した世界株式市場は、9 週連続で上昇を続けた後、一旦利益確定売りが優勢となる「調整局面」となりました。世界株式指数（MSCI World Index）は前月比▲0.80%と小幅な下落でした。

市場全体では方向感に欠ける展開となりましたが、その中でも**米国の大型ハイテク株は相対的に軟調**だった一方で、**景気敏感株やバリュー株の一部は堅調に推移**するなど、銘柄やセクターによって明暗が分かれました。

一見すると指数の下落は小幅ですが、その裏では非常に大きな値動きがありました。例えば、NASDAQ100 指数（NDX）は 6 月末時点では前月比▲0.19%とほぼ横ばいで終えたものの、**6 月 10 日時点では月初から約 6%下落**する局面がありました。

特に 6 月 5 日（金）には大きな下落が発生しました。前日に発表された Broadcom（AVGO）の決算が市場の期待を下回ったことに加え、米国の 5 月雇用統計が市場予想を上回る強い内容となり、FRB（米連邦準備制度理事会）の利下げ時期が後ずれするとの見方が強まったことが背景です。

この影響を受け、それまで市場を牽引してきた**半導体関連株や AI 関連銘柄**を中心に利益確定売りが広がりました。

金利市場では、米国 2 年国債利回りが **4.1%を超え（2025 年 2 月以来の高水準）**、10 年国債利回りも **4.5%近くまで上昇**しました。これに伴い米ドルも上昇し、金利上昇が株式市場の重しとなる展開でした。

また、この日は「モメンタム株（過去に大きく上昇してきた銘柄群）」が大きく売られ、AI 関連銘柄の多くが含まれるモメンタム・ファクターは、「Liberation Day」と呼ばれる急落局面以来で最大の下落となりました。

もっとも、年初来ではモメンタム株や半導体関連株は依然として高いリターンを維持しています。ただし、6 月は **VanEck Semiconductor ETF（SMH）が月間では約 10%上昇した一方で、その上昇過程では大きな上下動を繰り返しており、四半期前半のような一直線の上昇ではなく、ボラティリティ（価格変動）が大きく高まったことが特徴**でした。

総じて 6 月は、指数だけを見ると落ち着いた相場に見えるものの、実際には **AI・半導体関連を中心に大きな値動きが繰り返された、非常に神経質な市場環境**だったと言えます。

図1：ゴールドマン・サックス高ベータ・モメンタム指数の50日移動ボラティリティの推移
(2023年5月31日～2026年6月30日)



出所：アンタークティカ

図1は、AI・半導体などのモメンタム銘柄における価格変動率（ボラティリティ）の推移を示しています。2026年に入りボラティリティは大きく上昇しており、市場全体の指数以上に、AI関連銘柄では日々の値動きが激しくなっていることが分かります。これは短期的な利益確定売りやポジション調整が活発化したことを反映しています。

市場分析 1.

こうした大きな値動き（ボラティリティ）の背景には、世界の半導体・ハードウェア関連株に投資資金が過度に集中し、株価バリュエーションが高水準まで押し上げられていたことがあります。

また、その上昇ペースが極めて速かったことも、市場の不安定さを高める要因となりました。

特に、ヘッジファンドのグローバル・ロング・ショート戦略では、半導体セクターに対する実質的な買い持ち（ネット・エクスポージャー）が過去最高水準まで積み上がっていました。さらに、個人投資家の市場参加も非常に活発で、その多くがレバレッジ型ETFや0DTE（満期まで0日の超短期）オプションといった、値動きの大きい金融商品を利用して投資していたことから、市場の価格変動が一段と拡大しやすい状況となっていました。

図2：ゴールドマン・サックス プライムブックにおけるモメンタム戦略へのレバレッジ水準の推移
(2021年7月～2026年6月)

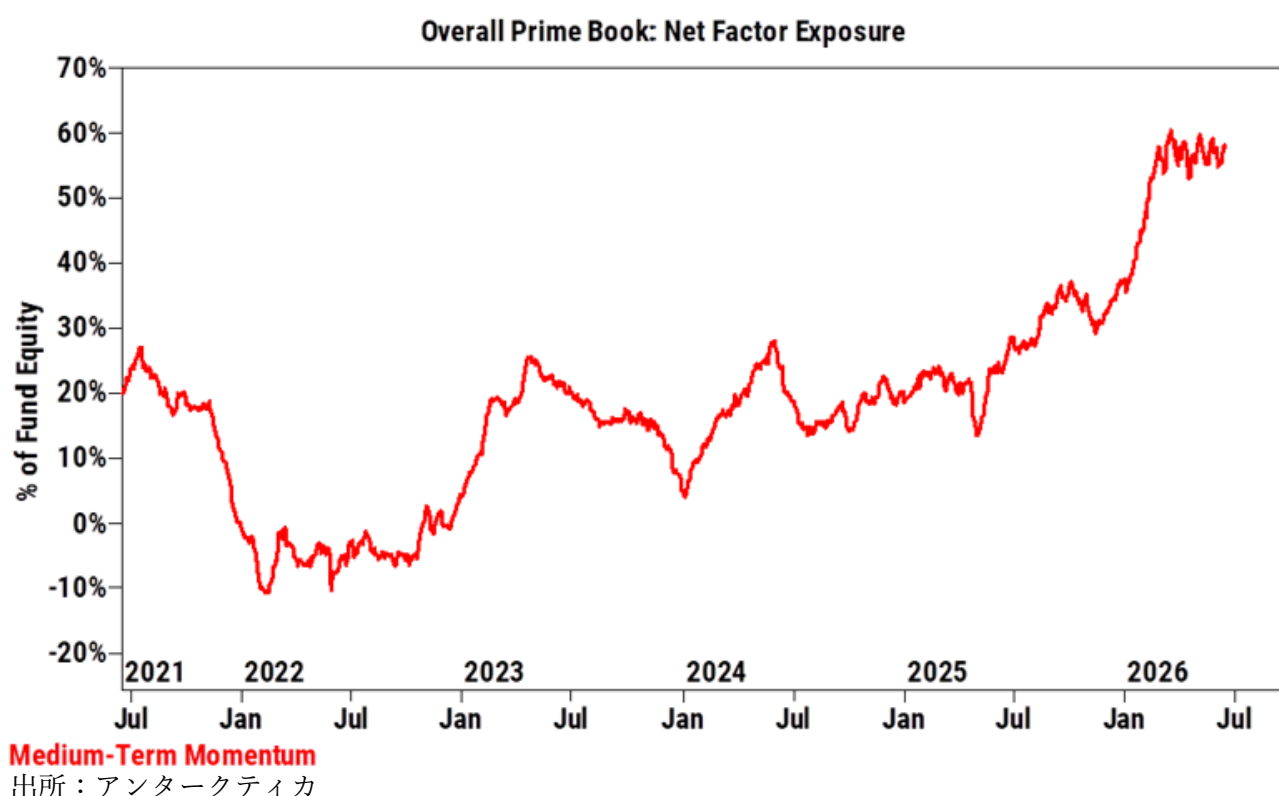


図2は、世界のヘッジファンドがAI・半導体などのモメンタム銘柄に対して過去最高水準のレバレッジをかけていたことを示しています。投資家のポジションが一方向に大きく偏っていたため、利益確定売りが始まるとポジション解消（アンワインド）が連鎖し、通常以上に価格変動が拡大しました。

市場分析 2.

6 月も市場では **AI 関連投資 (AI Capex) の持続性**が引き続き大きなテーマとなりました。ただし、市場の関心は「AI 関連なら何でも買われる」という段階から、「その投資は本当に利益につながるのか」という点へと移り始めています。

特に注目されたのは、AI 関連の巨額投資が**企業の利益やキャッシュフローではなく、社債や株式発行による資金調達に依存するケースが増えている**ことです。そのため、市場では「これだけの投資が将来十分な収益を生み出せるのか」という見方が強まりました。

この結果、AI 関連銘柄の中でも株価の動きに違いが生じました。AI 向けデータセンターなどへ巨額投資を行っている**マグニフィセント・セブン (Magnificent 7)**で構成される**ブルームバーグ指数**は 6 月に下落した一方で、AI インフラの構築に不可欠な**メモリー半導体メーカー**は引き続き上昇基調を維持しました。

その背景には、**マイクロン・テクノロジー (Micron)**の市場予想を大きく上回る決算があり、AI 向けメモリー需要の力強さが改めて確認されたことが挙げられます。

ヘッジファンドの投資動向にも同様の変化が見られました。ゴールドマン・サックスのプライムブローカレッジ (Prime Brokerage) データによると、**ハイパースケーラー (大手クラウド事業者)**への投資比率は過去約 3 年間で最低水準まで低下した一方で、**AI インフラ関連企業**への投資比率は過去約 3 年間で最高水準まで高まっています。

つまり、市場は「AI 関連であれば何でも評価する」局面から、「AI 投資によって実際に利益を享受できる企業を選別する」局面へと移行しつつあることがうかがえます。これは、AI テーマそのものが終わったということではなく、投資対象がより選別される段階に入ったことを示しています。

次ページの図 3 は、AI 関連企業の中でも株価パフォーマンスが二極化していることを示しています。

AI インフラへ巨額投資を行う**マグニフィセント・セブン**が軟調に推移した一方で、AI 向けメモリー半導体を供給する企業群は堅調な上昇を続けました。市場では、「AI 関連であれば一律に評価する」局面から、「AI 投資によって実際に利益を享受できる企業を選別する」局面へと移行しつつあることがうかがえます。

この図は、図 1 (ボラティリティの上昇)・図 2 (過熱したポジション) を受けて、「その調整後に市場の資金がどこへ向かったのか」を示す図と理解すると、レポート全体の流れが非常に分かりやすくなります。

図 3：ブルームバーグ・マグニフィセント・セブン・トータルリターン指数と
Roundhill Memory ETF（DRAM）のパフォーマンス比較
（2026 年 4 月 2 日〔DRAM 設定日〕～2026 年 6 月 30 日）



出所：アンタークティカ

市場動向

地域別では、**韓国株式市場が最も力強い上昇**を見せました。メモリー半導体で世界をリードする韓国は AI 需要拡大の恩恵を大きく受け、**韓国総合株価指数（KOSPI）は 6 月に 29%上昇**し、史上初めて 9,000 ポイントを突破しました。年初来では **101%の上昇**となり、世界でも突出したパフォーマンスとなっています。

一方で、急速な株価上昇の反動も見られました。6 月には急落局面で市場の過熱を抑えるため、韓国取引所が 3 度にわたり一時売買停止措置（サーキットブレーカー）を発動しており、相場の過熱感もうかがえます。

日本株も好調でした。NAND 型フラッシュメモリー大手の**キオクシア**は過去 12 か月で株価が約 32 倍（+3,216%）という驚異的な上昇を記録し、時価総額ではトヨタ自動車を上回り、日本市場最大の上場企業となりました。また、**日経平均株価は 6 月に約 6%上昇**し、ここ数年で最も良好な週間・四半期パフォーマンスを記録しました。

これに対し、中国株は主要市場の中で引き続き低調でした。**MSCI 中国指数は 6 月に 8%下落**し、アリババなどの大型テクノロジー企業や国内消費、不動産関連銘柄が引き続き軟調に推移しました。これまで新興国株式指数（MSCI EM）の中心的存在であった中国から、韓国や日本へ市場の関心が移りつつあることがうかがえます。

欧州市場も堅調でした。**欧州株価指数（STOXX Europe 600）は 6 月に約 3%上昇**し、ECB（欧州中央銀行）が利上げを実施したほか、中東情勢への懸念が続く中でも史上最高値を更新しました。比較的割安なバリュー株や高配当株への資金流入が続いたほか、AI 向け半導体製造装置最大手の **ASML** が、Oracle による AI 投資拡大の報道を受けて過去最高値を更新したことも市場を押し上げました。

金融市場・マクロ環境

6 月後半には、新たに FRB（米連邦準備制度理事会）議長に就任した**ケビン・ウォーシュ氏**が初めて FOMC（米連邦公開市場委員会）を開催し、市場の大きな注目を集めました。

市場では、月初の堅調な米雇用統計に加え、前週に発表された米国の 5 月消費者物価指数（CPI）が前年同月比 4.2%と、2023 年以來の高い伸びとなったことから、インフレ動向への警戒感が高まっていました。

ウォーシュ議長は市場予想以上に金融引き締めに向き（タカ派）な姿勢を示しました。

政策声明は簡潔な内容となり、将来の金融政策を事前に示す「フォワードガイダンス」に慎重な姿勢を示すとともに、**物価安定を最優先する姿勢**を強調しました。

この結果、市場では当面の利下げ期待が後退し、**米国2年国債利回り**は6月22日に4.25%まで上昇しました。

それでも株式市場は比較的落ち着いた値動きを維持しました。

その背景には、**米国とイランの関係改善への期待から原油価格**が1バレル=70ドル前後まで下落し、エネルギー価格上昇への懸念が後退したことがあります。インフレ圧力が依然として高い中で、エネルギー価格の低下は市場に安心感を与えました。

為替市場では、ウォーシュ議長のタカ派姿勢や堅調な米国経済指標を背景に**米ドル指数（DXY）**は6月に約2.3%上昇しました。一方で、インフレヘッジとして買われていた**金などの貴金属や暗号資産（仮想通貨）**は大きく下落し、インフレや通貨価値下落を前提とした投資（デバースメント・トレード）の巻き戻しが進む展開となりました。

情報ソース、及び注意事項：

アンタークティカ社、HFR ホームページ、ブルームバーグ、日経新聞、トムソン・ロイター、ウォール・ストリート・ジャーナル、リフィニティブ、QUICK などのソーシャルメディア、ウェブサイトの信頼できる情報に基づき、本資料を作成しておりますが、含まれる情報の正確性や完全性、また使用された市場情報源の正確性や信頼性を保障するものではありません。また、本株式の過去の運用実績に関する分析の提供は、将来の運用成績を示し保障するものではありません。エアーズシー証券株式会社は、当資料の分析、又はこれに関連した分析の使用により生じたいかなる損失にも責任を負いません。エアーズシー証券株式会社の許諾なしに、当資料の一部又は全部を引用または複製することを禁じます。